

## 記憶のオセロゲーム——『ドン・カズムツホ』と自伝的記憶

武田 千香

1 『ドン・カズムツホ』は告発記か？

カピトウの謎からサンチアゴの謎へ

『ドン・カズムツホ (Dom Casimiro)』は、ほぼ必ずといっていいほど、『ブラス・クーバスの死後の回想 (Memórias Póstumas de Brás Cubas)』と並べて挙げられるブラジルの文豪マシヤード・ジ・アシス (Machado de Assis, 1839-1908) の最高傑作である。孤独な老境を送る語り手ベント・サンチアゴが、妻カピトウと親友エスコバルの不義を確信して、ついには妻子ともどもスイスに追いやるまでの経緯を綴った手記という形式をとるこの小説には、コペルニクスの転回とも言うべき作品の解釈上の大きな転換を引き起こした、ある重要な「伝説的な事件」がある。一九六〇年に、この小説を英語に翻訳した北米のブラジル文学研究者のヘレン・コードウエル (Helen Caldwell) が、カピトウの不義は「冤罪」だという説を発表したのである。すると、六十年もの長きにわたり自明のこととして受け取られ、まったく疑われることのなかった妻の不義が、たちまちにして、嫉妬に駆られた夫が作りあげた妄想だという解釈が趨勢になった。これにより、妻カピトウは悲劇のヒロインに躍り出て、逆にそれま

で同情は集めても責められることはなかった夫サンチアゴが、無実の妻を追い出した卑劣な男として糾弾されるようになった。

現在では、カピトウの「白・黒」を議論することは、この小説の本題ではなく、むしろその両義的なところがこの小説の最大の特徴とされるようになっていくが、この論議は一時、一般読者のみならず批評家や文化人らまでを巻き込んで展開された。

コードウエルの問題提起をきっかけに、謎はカピトウではなく、「ドン・カズムツホ」こと語り手ベント・サンチアゴ本人にこそ向けられるようになった。「ドン・カズムツホ」とは、本人によれば、彼の「無口で自分の殻に閉じこもった」性格ゆえにつけられたあだ名で、彼はその名をこの回想記を執筆するときに引き受けている。そもそもサンチアゴがこの回想記の執筆を思い当ったのは、以前に「人生の両端を結び合わせ、老境に青春を再興」(二章) すべて行なった生家の再建が、失敗に終わったからだ。昔の家をそっくりそのままに建てなおしてみたものの、いざ建ってみると、それはまったく同じではなく、肝心な「自分」が欠けていた。そこで、生家の再建では埋められなかった「欠落した自分」を、回想記を書くことで取り戻したいと思ったのだ。サンチアゴは妻と親友の仲を疑い、嫉妬に駆られて妻子を追い出し、孤独な老境にひとり暮らす偏屈者「ド

ン・カズムツホ」になり果てていた。その「ドン・カズムツホ」こそが、この小説でもっとも問われる存在で、だからこそ題名が『ドン・カズムツホ』なのである。

一人称の語り手による回想記である以上、読者が知り得るのは彼の視点で書かれたことのみである。ブラジルの文学者のシルヴィアーノ・サンチアールゴ (Silviano Santiago) は、マシャードの唯一の関心は、ドン・カズムツホに美貌を遂げた語り手ベント・サンチアールゴという「心を持った人間 (Pessoa moral)」にあると述べる。カピトウの「白・黒」を論議する場合に問われるのは「カピトウの真実」だが、「サンチアールゴの真実」こそが問われるべきなのである。

### カピトウへの情愛と追慕の情

コードウエルの指摘以降、この小説の両義性は広く認められるところになった。だが、これにより形勢は圧倒的にサンチアールゴにとって不利に傾き、姦通は嫉妬に駆られた夫の捏造で、『ドン・カズムツホ』は、それを告発するために夫がしたためた手記として読まれることが多くなった。実は私自身も、当初はカピトウの「白・黒」論議に気をとられ、この小説を、サンチアールゴがカピトウの罪を読者に説得するために書いた手記として読んでいた時期もあった。

だが、『ドン・カズムツホ』のテキストを丁寧に読むうちに、果たしてベント・サンチアールゴは、本当に最初から妻を告発するつもりで書いたのだろうかという疑問を抱くようになった。

というのも、サンチアールゴの記述には、カピトウに対する彼の否定的な見解はほとんど見られず、むしろカピトウへの深い情愛と追慕の情の方が随所から伝わってくるからである。否定的な評価は、たいがい食客のジョゼ・ジアスや母の従姉妹ジュスチーナの口を通して伝えられている。サンチアールゴのほうは、たとえ自分が強い嫉妬に苦しむようになった後も、カピトウのやさしさや濃やかな気遣いを強調している。自分の天文学の雑談を聞かずに他のことを考えていたカピトウに腹を立て、サンチアールゴが部屋を出ていったときも、その後のカピトウは「さらにやさしくなり、空気ももつと柔らかに、夜ももつと明るく、神ももつと神になった」(百七章)と、彼女の並々ならぬ努力を書きとめ、サンチアールゴがいろいろな疑念に苛まされたときも、カピトウは「オリンピオの悲しみさえも吹き飛ばす」妙技で解消してくれ、「ますますやさしさを募らせた」(百十五章)と記している。サンチアールゴの嫉妬に対しても、カピトウは、それを呼び覚まさないように、窓辺で彼の帰りを待つことをやめ、子どもと一緒に階段の上で「子どものころと変わらぬこやかな笑みをたたえた愛らしい顔を覗かせて」待つていくれたと書いている(百十五章)。そして、さらにはエスコバールの死後、サンチアールゴが憂鬱な日々を送っていたときも、カピトウは「石をも感動させるほど」のやさしさ(百三十章)で接してくれたと、わざわざ書きとめているが、これは彼がカピトウの視線に目を留めたエスコバールの葬儀後のことである。

ここまでのカピトウのやさしさを、その罪を告発しようとする人間が書くだろうか。たしかにそれは彼女が自分の非を相殺するための擬装だったと考えられないわけではない。だが、た

とえそうであったとしても、ここまで頻繁に書きとめることはないのではないか。しかもこれらの記述にはアイロニーは感じられず、むしろ少なくともそれらを綴っているあいだは、カピトウのことを本当に愛おしく懐かしく思い出しているように読めるのだ。

### つじつまが合わない物語

さらにまた、もしサンチアゴが最初から妻を告発する目的で書いたとしたならば、「告発記」は、抜かりのない説得力のあるものに仕上がっているはずだ。ところが、サンチアゴの記述には、曖昧な箇所や齟齬や誤りが多々見受けられる。すべては書き出せないのですが、ここでは、とりわけ重要なものを三点、挙げておこう。

何よりもまず、サンチアゴが読者に対してカピトウの不義の証拠としている、エスコバル似だという息子エゼキエルに関連する証言自体が、根拠が乏しく曖昧である。サンチアゴによれば、エゼキエルはエスコバルと似ているというが、彼の主張する類似性は、頭の動き（百十六章）や目の動き（百三十一章）など後天的な特徴で、それらはむしろ癩と言ったほうがいい。また双方とも明るい色の瞳を持ち、ハンサムで、一人で考え込むところがあるとも言いが、それらはカピトウの特徴ともいえないことはない。そして数字を違えることなく話すところがエスコバルに似ているという主張も（百四十五章）、そんなことは考古学専攻ならば当然で、むしろ考古学という利潤度外視の

分野を専攻したことが、商売上手のエスコバル（九十八章）とは正反対だ。むしろ引き籠り気味のサンチアゴ似だといったほうがしっくりくる。このような心もとない類似性よりも、サンチャの父親グルジェルによって指摘された、亡妻とカピトウの他人の空似という反証のほうが、よほど説得力を持つ。

またエゼキエルの出生に関する証言も曖昧だ。サンチアゴは、エゼキエルの墓碑にある「おまえの歩みは完全なものであった。おまえが創造された日から」という聖書からの引用文を見て、「エゼキエルが創造された日は、いつだったのだろうか？」（百四十六章）と問う。だが、その答えを、彼の物語から導こうとすると、齟齬を来してしまうのだ。サンチアゴによれば、結婚二周年め（すなわち一八六七年三月）にはまだ子室に恵まれていない（百四章）。だとすると、たとえその後でカピトウがすぐに妊娠したとしても、エゼキエルの誕生は、どんなに早くても一八六七年の年末で、エスコバルが死んだ一八七一年三月（百二十二章）には、せいぜい三歳三ヶ月である。だが、サンチアゴの回想記では、エゼキエルの五、六歳のときのエピソードが、エスコバルがまだ生きていたときのこととして書かれているのだ（百十章）。

年号の誤りは、彼が事の発端として重要視するジョゼ・ジアスによる密告事件が起こった「ある午後」についても認められる。この密告事件は、母グロリアに十数年前の願掛けを思い起こさせるきっかけとなり、そもそも自分が神学校へ行かなければならなくなる原因を作った重要な事件である。だからこそサンチアゴは、「かの忘れもしない十一月のある午後」（二章）と書いているのだが、それにも拘わらず、百三章ではそれを「一八五八

年のあの午後」と記しているのだ。二章で、「午後は、それ以外にもたくさん経験した。もつといいものもあれば悪いものもあったが、あの午後は、一度たりともわたしの精神から消えたことがない」と言い切っている午後の年号を誤って記載しているのである。それは、告発記としてはあまりに致命的である。それほど誤りをそのままにするくらいだから、やはり執筆開始当初のサンチアゴには、告発の意図がなかったのではないか。むしろそこは彼が瞬間的に犯した記憶違いと解釈したほうがいいのではないか。サンチアゴは、自ら「わたしの記憶力は」「昨日履いたズボンすら思い出せない」（五十九章）、と言っているほかに、記憶力が悪かったのだから。

## 2 〈記憶の流れ〉

### 主体性を獲得した「記憶」

実は、「記憶」は、『ドン・カズムツホ』においてきわめて重要な役割を担っている。この作品に出てくる記憶にまつわる語彙数は半端ではなく、lembrar (覚えてる) / 思い出す / 思い出させる (recordar (思っ出す) / evocar (思っ起っす) / esquecer (忘れる) / 忘れさせる) といった動詞や、memória (記憶) / reminiscência (心覚え) / recordação (回想) / lembrança (思っ出) / evocação (想起) といった名詞など、「記憶」に係する語彙が多く見受けられる。そればかりではない。perder (失う) などの語彙を使って間接的に「忘失」を表現するものもあり、「記憶」への言及が見受けら

れる章は大多数に及ぶ。回想記ならば当然だと思えるかもしれないが、過去の事実を淡々と述べる分には、必ずしも記憶に関する語彙を頻繁に使う必要はない。それにも拘わらず、なぜそうした語彙が多く使われているかといえば、それはおそらくこの小説が回想や想起という行為を主題化しているからなのではないか。

「記憶」に関してサンチアゴは、五十九章「記憶のよい賓客」をはじめとするいくつかの章で、独自の論を展開し、初接吻の思い出に浸っているときの自分についても、「わたしは多少、接吻の思い出を濫用しているのかもしれない。だが、郷愁とはそういうものだ。昔の記憶を再生しては、また再生すること」と記す(三十四章)。登場人物を描写するときも、記憶力は重要な視点である。カピトウについては、自分の話を聴いているときの様子を、「わたしの報告を確認しながらラベルを貼り、記憶に貼りつけている」(三十一章) ようだと書き、エスコバールについても「自分の三歳のときの記憶を二つか三つ話」(九十三章) したと書く。さらには登場人物同士の会話にも、「覚えているかい?」「覚えてないわ」といった、相手の記憶を確かめるやりとりが六ヶ所認められるほか、読者にも、「女性読者は(……)あの歌詞を覚えていて、「カピトウの」物忘れのひどさに驚いていることだろう」(百十章) といった、記憶力を確かめる。カピトウと椰子菓子売りの歌を忘れないように誓い合ったというエピソードに至っては、四回も繰り返されている。

サンチアゴの「記憶」に対するこだわりは、文体にも反映される。たとえばlembrarという動詞でいえば、通常この動詞は、「思い出す／覚えている」という意味で使うときは再帰動詞とし

て用いることが多い (tembrarse de) が、『ドン・カズムツホ』では、それが「思い出させる」という他動詞で使われていることが圧倒的に多い。つまりサンチアゴは、「わたしは〇〇を思い出す」とは言わず、「(過去の出来事が) 私に〇〇を思い出させる」という言い方をするのである<sup>2</sup>。つまりこのとき主体的に動いているのは「わたし」ではない。「わたし」が稼働させている「記憶」である。このことは、サンチアゴが、「筆をおき、窓辺へ行つて、記憶に気分転換をさせ」ている(八十五章)と書いていることからわかるだろう。『ドン・カズムツホ』には、語り手が能動的に思い出したことではなく、語り手が自分の「記憶」を自由に働かせた結果、よみがえってきた過去が綴られているのである。

### サンチアゴの自伝的記憶

人がそれまでの生涯を振り返って想起する個人的経験に関するエピソードは、自伝的記憶と呼ばれ<sup>3</sup>、それは自己と不可分な関係にあり、自己機能と呼ばれる重要な機能を持つている。「自己機能」とは、「自伝的機能が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つ面」を言う<sup>4</sup>。この機能が「人生の両端を結び合わせ」(二章)るというサンチアゴの執筆動機とまさに重なることを考えると、どうやら『ドン・カズムツホ』は、典型的な自伝的記憶の形式をとった小説と捉えられそうである。

そもそもサンチアゴが、この回想記の執筆にとりかかったのは、「壁の肖像画が声をかけ」てくれ、「自分たちに過去の時

間を復元することができなかったのなら、自らペンをとつて少し語って見たらどうか」と言ってくれたことだった。彼はその提案を受け入れ、「少しづつよみがえってきた心おぼえの数々を紙面に綴り」、「これまで生きてきたものをふたたび生きる」(二章、傍点筆者)べく、作品にとりかかり、「まずはかの忘れもしない十一月のある午後を呼び起こ」した。そしてその「ある午後」を手がかりに湧き出てきた記憶を起点に綴られ始めたのが『ドン・カズムツホ』なのだが、注意したいのは、その「ある午後」を思い出すときだけは、サンチアゴが「evocação (呼び起こすこと、想起)」という単語を使っていることだ。つまりこのときだけは、記憶の手がかりとしてそれを故意に呼び起こす必要があったのだ。だがその後は、とくに努力することもなく、自然と「少しづつよみがえってきた心おぼえの数々を紙面に綴」っていくことになる。内容の齟齬や記憶違いや曖昧さがそのまま残されているのは、このためなのではないか。

さて、自伝的記憶には、意図的に思い出す「随意記憶」と、「意志の働きなしに過去のことが自発的によみがえってくる形態」をとる「不随意記憶」があり<sup>5</sup>、後者には「人々が過去の自分と現在の自分を結び付け、自己の連続性の感覚を付与する役割」があるという<sup>6</sup>。これがサンチアゴの執筆動機と一致する点も興味深い。不随意記憶に関しては、気分がニュートラルなときに想起しやすい<sup>7</sup>という点も興味を引く。なぜならばそれが、やはりサンチアゴがこの回想記の執筆を思い立ったときの状況と一致するからだ。彼はそのときのことを、「時間の大半を、畑仕事と庭いじりと読書に費やし、食事もちゃんととり、寝つきも悪くない」と書いている。つまり彼は、気分がとくに高揚

部	章	主な記述内容(出来事)	経過時間	手がかり
第一部	1～10:プロローグ	執筆動機、登場人物紹介	数か月	「ある午後」
	11～16	「ある午後」の密告事件		
	17:紙魚			
	18～53	18～24:「ある午後」(密告直後、カピトゥとのやりとり等) 18:椰子菓子売りの歌① 25～31:「ある午後」の翌日(パセイオ・プブリコにて) 31～41:「ある午後」の数日後(髪結い、初接吻、母との会見等) 42～49:その翌日の出来事(カピトゥと喧嘩・和解)		
	50～53	神学校入学前の別れ		
第二部	54:序	『聖モニカ』の想起、届けられた経緯	2年	『聖モニカの賛歌』
	55:ソネット			
	56～58	紙面から甦ってきた神学校時代(神学生、転んだ女性等)		
	59:記憶力のよい貴客			
	60～63	紙面から甦ってきた神学校時代(ジョゼ・ジアスの神学校訪問) 60:椰子菓子売りの歌② 62:イヤーゴウの矛先:第一の嫉妬		
	64:あるアイデアをためらい			
	65～67	紙面から甦ってきた神学校時代(カピトゥの擬装、母の病気)		
	68:美徳は延期しよう			
	69～71	紙面から甦ってきた神学校時代(教会へ) 71:エスコバルの訪問①		
	72:戯曲の改造			
	73～75	紙面から甦ってきた神学校時代 73:ステージマネージャー:第二の嫉妬		
	77:古い苦悩の快楽			
	78	紙面から甦ってきた神学校時代(ふて寝) 78:エスコバルの訪問②		
	79:問題の章に行こう 80:いよいよ問題の章だ			
	81～90	紙面から甦ってきた神学校時代(サンシャ宅へ、マンドウカの死) 85:いったん中断。記憶に気分転換		
91:論争:心なくきめられる発見				
92～100	紙面から甦ってきた神学校時代(ローマ行き提案、代替案) 93:エスコバルの訪問③(庭を案内) 97:神学校中退 98:18歳～22歳、大学卒業			
第三部	101	結婚式	30年余り	現在の結果 (なぜこんな結果になったのか?) 「グロリアのカピトゥは マタカヴァーロスのカ ピトゥの中にすでに 宿っていたのか?」
	102～118	102:結婚後～ 105「腕」:腕に触れる男に嫉妬 106:海に嫉妬 107:妻の頭にあったかもしれないことに嫉妬 108:エゼキエル誕生。カピトゥが愛情の配分に配慮 108:「今はカズムツホ」 109:エゼキエル5歳、110:5、6歳のエピソード 109:椰子菓子売りの歌③ 113:全員に嫉妬 114:椰子菓子売りの歌④の誓い 115:疑念の井戸。カピトゥがサンチアーゴの嫉妬に配慮 121:エスコバルの溺死→葬儀 123:「引き波の目」に目を留める		
	119:女性読者よ、それはしないでくれ			
	120～124	葬儀		
	125:嘘			
	126～128	126:妻の目への疑念、再構成		
	129:サンシャへ			
	130～143	131:エゼキエルの目の類似に目をとめる。 132:エゼキエルを寄宿学校へ 134:毒を購入 135:「オセロウ」観劇 136～137:服毒の試み 138:別れの宣告 141:妻子、ヨーロッパへ 142:母の死 143:ジョゼ・ジアスの死		
	144:運まきの質問			
	145～147	145:エゼキエルの帰還 146:エゼキエルの死 147:ドン・カズムツホの忘憂		
148:エピローグ(さて、残りは?)	グロリアのカピトゥはマタカヴァーロスのカピトゥの中にすでに宿っていたのか?			

表1

※網掛けの章は、語りが現在からの視点による思考のみのもの

したり消沈したりしていいときに書き起こし始めているわけで、このことはすなわち、彼が嫉妬ゆえの激情に駆られて執筆にとりかかったのではないことを示しているからである。

### 「記憶」の時間

では、よみがえってきた記憶はどのように綴られたのだろうか。今度はそれをみていこう。

『ドン・カズムツホ』は、内容から二つの部分に分けることができる(表1参照)<sup>8</sup>。第一部は、神学校へ入学する五十三章までの部分、第二部は、神学校入学後、中退を果たして大学を卒業するまでの五十四章から百章である。そして第三部は百一章以降で、そこには結婚、妻と親友の姦通への嫌疑、妻子の追放、孤独な老境が書かれている。ご覧のように章の配分は、各章がだいたい五十章ずつで均等である。だが、それぞれの経過時間となると、数か月、七年、約三十年と不均衡になる。しかも第一部の数か月は、表1からも明らかのように、四十九章から五十章の間に流れた(というより跳んだ)時間であり、大半が「ある午後のできごと」から一週間内に起こったことに割かれている。最近の記憶の研究によれば、「自伝的記憶は、たった一つの時間軸から成り立っているとは考えにくく、「おそらくいくつかのテーマに沿った複数の時間の流れが存在し、それらの時間軸は所々で接点をもつことにより、ゆるやかなまとまりを持って自伝的記憶という一つの過去を構成している」という<sup>9</sup>。つまり第一部に流れている時間は、「ある午後」というテーマに沿

った時間であり、第一部は大部分が「ある午後」を手がかりとしてあふれ出てきた「記憶」だと考えられるだろう。

人間の体験の背後には、かならず時計的な時間の流れがあるように思いがちだが、それは間違いで、体験を枠づける時計的な時間と、当の体験を生きている視点は同じものではない<sup>10</sup>。第一部の内容は、時計的な時間から言えば、大部分がたった一週間だが、サンチアゴの主観的時間としては、全回想の三分の一に相当するのである。

とはいえ、第一部が完全に主観的時間によって綴られているわけではない。たとえば、「ある午後」があった一八五七年のよきな客観的な時間もところどころに織り込まれているが、それは、読者がサンチアゴの「記憶」と共有できるようにとマシャードが行なった、いかなれば「時間的体制化」である。人は自伝的記憶を語るときに、「他者と記憶を共有するための正確な時間的体制化と同時に、多少変容した主観的な時間的体制化を行な<sup>11</sup>」う。章の配分と経過時間のずれは、サンチアゴがその体験に対しておく重要性を表わしているのである。

次に第二部を見てみよう。神学校についてサンチアゴは、「神学校のことは語るまい」(五十四章)と書きながら、結果的には九十六章までずっと「しばしわれわれの古い神学校を生きる」(五十四章)ことになる。第一部の記憶のてがかりが「ある午後」の事件」だったとすれば、第二部は、『聖モニカ賛歌』が手がかりとなつてよみがえってきた「記憶」だということが出来るだろう。第二部では一年半ほどが経過しているが<sup>12</sup>、これを書くときのサンチアゴは、第一部以上に客観的時間に頓着しない。それをよく示しているのがエスコバールの訪問である。第二部

には、エスコバールがサンチアゴの家を訪問したというエピソードが合計三回出てくるのだが、生起した時間が特定できないため、果たしてそれらが同一の訪問を指すのか、あるいは別の訪問を指すのかが、読めば読むほどわからなくなってくるのである。

最初の記述が出てくる七十一章で、「そこまで訪ねてきてくれたことはそれ以前に一度もなく」と書かれ、また三回めの記述でも「わたしが最初に帰宅した土曜日」（八十一章）の翌日に起こったと書かれていることから、そこだけを読めば、それらは同一の訪問を言っているように読めるが、内容が一部食い違っているのだ。一回めでは、エスコバールがいったん遠慮した後で受けたと書かれている昼食が、三回めでは、最初から食べるつもりで来た（九十三章）ことになっているのである。このような例は、エスコバールの訪問に限ったことではない。こうした齟齬は、第二部のサンチアゴの語りが、相当に主観的時間の支配を受けている表われであろう。

サンチアゴは九十七章で、「本来ならばここが本の半分になるべきなのだが、わたしの経験不足のせいでペンのあとを迫りかけることになり、物語の佳境を話さぬうちに、ほとんど紙面が尽きてしまった」と書いている。回想記の最初から合計しても二年と少しであり、その後まだ数十年の人生が残っているというのに、なぜこの時点が「本来ならばここが半分になるべき」と言えるのか。この疑問は、これまで多くの研究者を悩ませてきたものだが<sup>13</sup>、結局はそこがサンチアゴの記憶の主観的時間感覚ということなのだ。自伝的記憶には、「青年期から成人期にかけての期間について不釣り合いなほど多くの出来事を思

い出す傾向がある」という特徴があり、これを「レミニセンス・バンプ」と呼ぶという<sup>14</sup>。『ドン・カズムツホ』に描きこまれているのは、まさにサンチアゴの「レミニセンス・バンプ」なのではないか。それにしても、マシヤードが人間の記憶の在り様を、そこまで忠実に描きこんだことにはつくづく驚かされる。

### 3 再構成される過去

#### 「記憶」の逆行的視点

第一部と第二部は、いずれも過去の事物を記憶の手がかりとしていた点では共通しているが、これらのあいだにはひとつ大きな違いがある。それは第二部では、第一部に比べて現在の視点からの考察やコメントが増えていることである。表1にある網かけのある欄は、語りが現在からの視点による思考のみで構成されている章である。そのような章が、第二部で突として増えているのがわかるだろう。ただし、だからといってこのようなコメントや思考が第一部にまったくなかったわけではないことは注意しておきたい。第一部でもサンチアゴはしょっちゅう過去の自分や自分の語りについて、冷静な分析やコメントを加えていた。そもそもどんな想起においても、現在の既定事実を前提に過去を眺めるといふ側面を免れることはできないのである<sup>15</sup>。したがって、現在からの視点による思考やコメントは、『ドン・カズムツホ』の全語りを通して見られるが、語りをいったん中断し、一章丸ごとを割いて現在の考察やコメントを行なっ



ているのは、第一部では十七章の「紙魚」、一章である。

だが、第二部は違う。よみがえってきた記憶の流れを中断して、現在の視点からの考察を加えたり、挿話を入れたりすることが、頻度や量ともに多くなっている。つまり第一部で主を成している「順行的」な語りのところどころに「逆行的」な視点による語りが交叉するようになっていっているのだ。

そして、この「逆行的」な視点こそが第三部を支配するようになる。このことは、記述内容にも反映され、表1からも明らかのように、第三部に入ると、物語はにわかには歩みを速め、一気にエスコバールの死と妻子の追放という結末へ向かって急展開していく。経過時間は、実に三十余年で、一週間のできごとが約四十章にわたって綴られた第一部と、時間軸も曖昧にされ、冊子から浮かびあがる思い出が、やはり約四十章をかけて書かれていた第二部とは大きく異なっている。

第三部のサンチアゴが記憶の手がかりとするのは、もはや過去の特定の事物ではない。彼は、現在を想起の起点とし、現在の結果をふまえ、なぜこうなったか、その原因や経緯を、現在の視点から逆行的に探りながら語り始める。七十二章の「戯曲の改造」で、『オセロウ』を見たサンチアゴが、「もしかしたら、このジャンルは多少の改造の余地があるかもしれない、わたしたちだったら、試しに戯曲を結末から上演することを提案してみるかもしれない」と書いたのは、第三部で彼が採用することになるこの手法を予告してのことだったのだろう。

さて、この逆行的視点が語りを支配すると、過去は現在の結果から逆にたどられ、経緯をあとづけられて、逆行的に解釈されるものになる<sup>16</sup>。すなわち「結果が物語を彩る」<sup>17</sup>ようになる。

## ベントの嫉妬と疑念

では、なぜサンチアゴは、語りの手法を急に変えたのだろうか。

実は逆行的視点のほかに、もうひとつ第三部で際立っているものがある。嫉妬と疑念である。第一部では皆無、第二部では二度だった嫉妬に関する言及が、第三部に入るなり急増しているのである。

「嫉妬と疑念」というテーマは、マシャードが小説を書き始めた頃から取り組んだものである。最初の長編小説『復活 (Resurreiçào)』(一八七二)に出てくる主人公フェリックスは、嫉妬深く非常に猜疑心が強い青年である。そのため、愛し合っただけで婚約まで交わした未亡人リヴィアの過去や男性関係に対しても疑心暗鬼になり、結婚間際に婚約を破棄してしまう。ちょうど『ドン・カズムツホ』のベント・サンチアゴが、カピトゥの眺める海にまで嫉妬し、「イベリア半島の雌馬」(四十章)並みの想像力を持つていたように、フェリックスも「どんな軽いバラの葉一枚にも苦悩するほど」<sup>18</sup>嫉妬深く、「疑念にとつて彼の精神は肥沃な土壌」で、何気ない他人の一言で「種を植えつけられ、撒かれたらすぐに根を生やし、成長する」<sup>19</sup>ほどの想像力を持つていた。この二編の小説は、どちらにもシェイクスピアの『オセロウ』への言及があり、異常なまでの嫉妬と疑念ゆえに主人公が自滅していくという点で共通している。

だが、初めて書いた小説『復活』と約三十年の知見と経験の賜物である『ドン・カズムツホ』のあいだには、当然のことな

がら大きな開きがある。ここでは重要な形式上の違いを二点指摘しておこう。

一つは、語り手の違いである。『ドン・カズムツホ』は、語り手ベント・サンチアールゴの一人称小説であるが、『復活』は、全知の語り手による三人称小説である。このため『復活』では、語り手が登場人物の性格や筋の展開について絶えず解説を加え、たとえばフェリックスがリヴィアの男性関係に疑念を抱いたときには、それが「冤罪」であることが語り手によって明かされる。まさに同じような疑念が、『ドン・カズムツホ』においては永遠の謎として残されるのとは対照的である。

もう一つの大きな違いは、物語の舞台である。マシャードは『復活』で、嫉妬以外にも一つ描くことをめざした。それは「二つの異なる性格の対照性」<sup>20</sup>で、それは猜疑心が強く嫉妬深い主人公フェリックスと、寛大で包容力のある人物として描かれるリヴィアという主要登場人物の性格の違いというかたちで実現されている。この結果、二人の攻防は、まるで「悪」と「善」の戦いのような様相を帯びる。

同じような戦いは『ドン・カズムツホ』でも見られるが、舞台はもはや二人の別々の人間ではない。それはサンチアールゴの頭（心）の中に移され、「善」なるものと、嫉妬から生じる「悪」なるものの葛藤として繰り広げられる。このことは、コードウエルが指摘したように、「Santo（聖人）」と「Iago（イヤールゴウ）」の二つの部分を含む彼の名前「サンチアールゴ（Santiago）」にも表われている<sup>21</sup>。「イヤールゴウ」は言うまでもなく、シェイクスピアのオセロウに嫉妬を植えつけた張本人である。

嫉妬は、第三部で初めて現われたわけではなく、すでに第二

部で見え隠れし、ベントを二度襲っている。入学直後に神学校を訪ねたジョゼ・ジアスの口から、カピトウは楽しそうにやっていると聞かされたとき（六十二章）と、自宅に帰ったときに馬に乗って通り過ぎながらカピトウに目をやったダンデイを見たとき（七十三章）である。最初に嫉妬が登場した六十二章には、シェイクスピアの『オセロウ』で、嫉妬の原因を作った登場人物の名をとって、「イヤールゴウの微かな兆し」という題名がつけられている。

#### 伝統の逆襲・嫉妬の刃

第二部で芽生えた嫉妬は、第三部に入ると、ベントに猛襲をかけ始め（表1参照）、百五章の舞踏会では、カピトウの見事な腕に見入る他の男性に感じる程度だったが、百六章ではカピトウがみつめた海に対して抱くようになり、百七章では「妻の頭の中にあつたかもしれないこと」にまで向けられるようになる。そしてそれは、百十三章で極限に達する。

その度合いときたら、彼女のどんな些細な動作にも苦しみ、つまらないひと言にも、どんなこだわりにも苦しむほどだった。とうとうあらゆる人にまで向けられるほどになった。多くのばあい、無視されただけでじゅうぶんだった。わたしはすべてに対し、全員に対して嫉妬を抱くにいたった。近所の人、ワルツの相手、男ならだれでも、若くても熟年でも、わたしを恐怖や疑念で満たした。  
(百十三章「第三者の異議申し立て」)

一方、募るサンチアールゴの疑念や嫉妬に対し、カピトウは「ますますやさしさを募らせ」、「嫉妬を呼び覚まさないように」窓辺ではなく階段の上で、子どもといっしょに「こどものころと変わらないにこやかな笑みをたたえた愛らしい顔を覗かせて」（百十五章）待つようになるほど細やかな気を配った。それでもベントの嫉妬の増殖を抑えることはできなかった。

では、なぜ第三部に入って、嫉妬ががぜん力を発揮し始めたのか。

ブラジルの文学研究者ホベルト・シュワルツは『ドン・カズムツホ』を二つに分けて考える。前半は、カピトウのリードのもとに、恋愛成就をめざして二人が一致協力し、晴れて結婚を勝ち取るまでの勝利への道のりである。対する後半は、結婚してから破滅に至るまでの奈落への下り坂だ。どうやら分水嶺は結婚にありそうである。

ここで忘れてはならないのが、サンチアールゴとカピトウのあいだに横たわる社会的な身分の差である。当時のブラジルは、奴隷制度が敷かれた家父長制社会で、父親が連邦議員まで務めたサンチアールゴ家は、支配階級に属していた。かつて地方には農場を持ち、名前の頭文字でアルファベット全文字が揃いそうなくらいに大勢の奴隷を所有する富裕な旧家である。一方のカピトウは、父親が公務員で、一軒家には宝くじで特賞を当てたからこそ住めるという境遇である。そのうえ「褐色肌」で「人種」的な違いもあった。結婚前は、身分の違いを克服して結婚することをめざして、力を合わせて伝統社会を相手に戦ったが、結婚後は、その共通の目標も失い、サンチアールゴは家長としての

権力を手にし、カピトウは既存の社会体制に組み入れられてしまふ。

問題は、彼に家長としての能力が備わっていなかったことだった。シュワルツは、彼は「明らかに家父長になる訓練ができていず」、またカピトウに対しても常に劣等感を抱き続けていたために、「自分が彼女にふさわしい『男』でないことを痛感していた」と言う。そもそも結婚前にサンチアールゴが従順で素直だったのも、実は指導力や行動力のなさの表われだったのだ。資格のない者が長となったとき、能力のなさは往々にして横暴性として裏返る。このために家長という「新しい状況のなかで、昔からの思慮分別のなさや、一家の頭としての意思と自分自身の意思の間に線を引けない無能さ」<sup>22</sup>が嫉妬をあらぬ方向へと炸裂させることになったのだ。こうしてせつかく二人の協働で勝ち取った近代的かつ民主主義的な関係も、あえなく、息を吹き返した家父長的主従関係の前にねじ伏せられてしまったのであった。

### 記憶のオセロゲーム

重要なことは、サンチアールゴの想起が、感覚を伴って行なわれていることだ。サンチアールゴは、青春時代の恋の危機を語りながら「特別な快感を味わ」（七十七章）い、エスコバールの強く握る手を思い出したときには、「いまでも指が痛」（九十四章）の思いをしている。使う「聴覚も耳ではなく記憶によるもの」（六十二章）であるため、当時の激しい動悸が今のサンチアールゴ

に聞かえていられるほどである。「感覚によって思い出」(五十章)しているため、当時の感覚はそのままよみがえる。

結局、嫉妬もその一つなのである。サンチアゴは結婚後の記憶を取り戻すにつれ、強い嫉妬の再襲来を受け、当時と同じ混乱と危機的状況に陥ったのだ。不義の重要な証拠であるはずのエゼキエルにまつわる省略や非論理性や曖昧さは、その表われなのではないか。

またもう一つ重要なことは、サンチアゴが想起している対象が過去の事実や事象ばかりではないことである。彼は、過去のある時点で思い出された「記憶」や思考、そしてその想起や思考の在り様も現在の想起の対象にしている。たとえば、カピトウから別離の最終判断をゆだねられたときのことを、サンチアゴは次のように書いていく。

そのあいだ、わたしは亡きグルジェルの言葉を思い起こしていた。(……)それに混じって、遠い昔のエピソードがぼんやりと浮かび、言葉や出会いやでき事なども思い出された。すべては、わたしの盲目ゆえに、そこに悪意を見出さず、またわたしの古い嫉妬も見おとしていたものだ。あるとき、帰ったら彼らは二人きりで黙っていたことがあったし、思わず聞いて笑ってしまった秘密、彼女の寝言など、すべての心おぼえがいまになって次々とよみがえり、あまりに一気に押し寄せたため、わたしは頭がくらくらしてきた……。 (……)そのときはなんとも思わなかったがすべて、いまになって思い出されてきた。(百四十章「教会から帰って」)

ここで彼が綴っているのは過去の事実ではない。過去のある

時点で想起された「記憶」に関する現在の「記憶」である。

人間の「記憶」は、不安や嫉妬を栄養にして膨らんだかと思えば<sup>23</sup>、自分に都合の悪いことがあると、注意をそらさせ、たとえ目に入っているものでも見えなくしてしまう<sup>24</sup>。人間にはだれしも自分を肯定的にとらえ自尊心をたかめたいという欲求と自分を否定的な事実から守りたいという自己防衛傾向がある<sup>25</sup>。このため、私たちは無意識のうちに、自分に納得のいく素材を取りそろえ、自分にとって都合のいい物語を作るために、情報を巧みに取捨選択したり修正や歪曲を施したりし<sup>26</sup>、ときには結論を恣意的に操ることもある<sup>27</sup>。過去は、今、自分が置かれている状況に合わせていくらでも再構成されて書き換えられるのだ<sup>28</sup>。「人は、自分の望んでいることを信じる」と、ユリウス・カエサルは言ったという(『ガリア戦記』)<sup>29</sup>。

おそらくカピトウとの別離を決意する直前のサンチアゴにも、同様のことが起こったのだ。普通の心理状況であれば、無実のデズデモーナが殺される『オセロウ』が自分の情況に当てはまらないことはすぐにわかるはずだ。だが、そうした矛盾にも気がつかず、「死ぬべきなのはわたしではなく、カピトウ」だという結論を導いてしまったのも、たとえ目に入っているものでも見えなくなる情況に追い込まれたからなのだろう。

いろいろなことを思い出すうちに「遠い昔のエピソードがぼんやりと浮かび、言葉や出会いやできごとなどが思い出され」、「すべての記憶が次々とよみがえり、あのときはなんとも思わなかったことがすべて、いまになって思い出されてきた」(百四十章)と彼は書いている。昔は何とも思わなかったことが、今、思い出すと、急に悪意のあるものに思えてきたりすることは、だ

れにでもある。もしかしたら昔は感心したカピトウの慎重さや強い好奇心や向上心が、一転して、下心のある計算高さや飽くなき野望や出世欲に見えてきたのではないか。たとえばシユワルツは、十四歳のときのカピトウに関する次の描写の多義性を指摘している<sup>30</sup>。

ご覧のとおりカピトウは、十四歳にしてもう大胆なアイデアを持つていたが、それもまだ、その先にやってくるものに比べればかわいものだった。とはいえ、大胆なのはアイデアだけで、じつさいの行動は器用で、曲がりくねり音もなく、目標へもひとつ飛びではなく、小刻みな跳躍をへて到達した。(十八章「計画」)

この描写は、読む情況によっていろいろな解釈を施すことができるだろう。まだ嫉妬の洗礼を受けていない段階では、慎重で着実に事にあたる優秀さとして肯定的に評価できるが、裏切られたのではないかという疑念と嫉妬に苛まれた夫が、それを振り返ったとき、それはカピトウの大胆で狡猾な性格の表われと様相を変え、「グロリアのカピトウはマタカヴァーロスのカピトウの中にすでに宿っていた」という結論を導くための誘因となる。

情報の中には、少しスピンさせるだけで、同じことをまったく正反対にとらえることができるものがある<sup>31</sup>。曖昧な情報は、自分の予想や思惑と合致するように一方的な解釈をあたえることで、簡単に百八十度異なる結論を導くように使うことができる。このような両義的な記述が『ドン・カズムツホ』には無数に散りばめられている。第一部で主を成す順行的な語りの文脈

では肯定的に捉えられることも、第三部を照らす逆行的な光に照らされると、それらは突如として否定的な輝きを放つことになるのだ。

そのようにして評価を変えたサンチアゴに、ジョゼ・ジラスやジュスチーナの否定的な評価や、ジョゼ・ジラスの与えた「裏のありそうな斜に構えたジプシーの目」という規定が追い打ちをかけた。すると、まるでオセロゲームのように、それまでは「白」だった一連の「記憶」の数々が、いつせいにばらばらと「黒」へ変わり始め、疑わしきカピトウの物語ができあがったのだ。

### 「自分」の奪還

おそらくだまされたのは読者だけではない。ほかのだけよりもサンチアゴ自身が、彼の「記憶」という無意識の「だましの情報処理システム」<sup>32</sup>にだまされたのだ。となると、カピトウの姦通は、たとえサンチアゴの捏造であったとしても、それは故意ではない。『ドン・カズムツホ』は、夫サンチアゴが最初から妻カピトウの罪を告発するつもりで書いた手記ではなく、夫が自らの記憶をたどるうちにそのときの感覚が甦り、やはり昔、記憶をたどりながら作ってしまった物語を、ふたたび紡ぎ出してしまふそのありさまが綴られた手記なのだ。

サンチアゴは、日ごろから「ゆらめく影たち」(二章)の来襲を受けていたようだが、もしかしたらその「影」とは、過去に下した判断に対する一抹の不安だったのではないか。姦通を疑い、妻子を追いつ出したことは、もう動かしえない厳然たる事

実で、過去は変えられない。それを否定すれば、自分の人生そのものを覆すことになる。果たして自分がしたことは正しかったのかと。

だからこそ彼は、自伝的記憶を語ったのだ。すでに述べたように、自伝的記憶の重要な機能の一つには、自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つというものがある<sup>33</sup>。サンチアゴにとって『ドン・カズムツホ』の執筆は、言ってみれば自己の心理療法のようなもので、自分の記憶を想起する中で、過去の出来事と自己を結びつけ、ライフストーリーを構成することで自己の一貫性を確認するプロセスとなったのだ<sup>34</sup>。『ドン・カズムツホ』の執筆終了後で、サンチアゴが次なる作品への意欲を見せているところを見ると、おそらく彼はその「影」を振り払うことに成功したのだろう。

マタカヴァーロスの家を再建したとき、そこでは「すべてが異様で、敵意があつた」(百四十四章)というが、きつとそれは、過去を忠実に再現した家が「望ましい自己像を維持するのに役立つ」たなかったからなのだ。自分の納得するような物語を作つてこそ、彼はマタカヴァーロスの生家の再建では取り戻せなかった自分を、見事に奪還できたのだ。これこそがフィクションまたは文学の威力なのだろうか。

#### 4 問われる読者の姿勢

それにしてもなぜ昔はだまされた読者が、今はだまされなくなったのだろうか。

彼は、執筆方針を次のように書いている。

さて、自分の本質を書く方法はただ一つ。善いことも悪いこともすべて語ることだ。それを、わたしはする。思い出が少しずつよみがえり、わたしそのものの構築と再構築に合っていくうちに。

(六十八章「美德は延期しよう」)

つまりサンチアゴは、記述に偏りが生じないように心がけ、自分にとって有利なことも不利なことも書いている。たとえばカピトゥと喧嘩後、仲直りしたときの場面では、「もしこの本にみずからの栄光を求めているならば、交渉はわたしから持ちかけたと書くだろう。だが、そうではない。それは彼女がもちかけた」(四十六章)と、自分に不利な情報を正直に告白している。そうやって「善いことも悪いこともすべて語」られるうちに、それらが「わたしそのものの構築と再構築」に合つていったのだ。したがって、できあがった物語に偏りが生じたとしても、それはサンチアゴの再構築のプロセスで起こったことであつて、回想記の内容のせいではない。

読者に示されているのも、このサンチアゴができる限り偏らないように配慮して作成したテクストである。ここで読者に求められるのは、サンチアゴが彼の物語を作つたように、今度自分でこれを使いながら「欠落部分を埋め」(五十九章)、「再構築」をし、自分の物語を作ることなのである。

だが、このときに問われるのが読者の姿勢である。というのも私たち人間は、過去のさまざまな経験に基づいて特定のスキーマと呼ばれる潜在的な知識構造を獲得しているからだ。いつ

の間にか独自のものの見方や考え方の枠組みを身に着け、これが見ること、聞くこと、注意を向けること、記憶すること、考えることなど認知に影響を与え、規定する<sup>35</sup>。その代表的なのがステレオタイプや偏見だ。サンチアゴが作った物語に彼の先入観や偏見が反映されていたように、読者の物語にも、各自のスキーマが反映される。この回想記の何を無視して、何を選び取り、どのような物語を作るかで、読者それぞれの頭の中が問われるというわけである。

また世の中で起こるできごとは、それがどのようなフレームのなかにおかれるかによって、意味を変える<sup>36</sup>。個々の事物は、それそのものとしては何も語らず、何らかの物語に位置づけられたとき、はじめてその意味が確定する<sup>37</sup>。バルザックの『谷間の百合』や、フローベールの『ボヴァリー夫人』、『感情教育』といったフランスの「姦通小説」を、十九世紀を通して受容した後のブラジルで、『ドン・カズムツホ』が、やはり「姦通小説」として提示されたとき、そこには最初から「姦通」というフレームがはめられた。おそらく初期の読者は、この小説をそのフレームの中で読んだことだろう。そして、そのフレームじたい、それが置かれる時代や社会によっても意味を変える。したがって、「姦通」という行為そのものの受け止め方や評価も一様ではありえない。

『ドン・カズムツホ』に複数のヴァージョンが生まれる理由はここにある。「両義性」どころではない。この作品は、時代や社会や文化にに応じて、複数のスキーマと輻輳的な関係を結び、複数のヴァージョンを生み出す。『ドン・カズムツホ』は、複数の意味を複数のままに体験する姿勢を受け入れる作品なのである。

このように考えると、「カピトウの冤罪」が、アメリカ人の、しかも女性によつて初めて唱えられたことにも意味があることはすぐに見当がつくだろう。同時代のブラジルの読者らには見えないものが見えたからこそ、新しい物語が作られたのだ。非ヨーロッパで、非ラテンで、非カトリックで、しかも非男性の注意深い読者が現われたからこそ、有色の肌をした貧しい生まれのカピトウは、出版から半世紀以上を経て初めて弁護人を得たのである。

## 注

- 1 武田一九九六、武田二〇一一。覚えているかどうかを確認する会話が見られるのは以下の六カ所。十八章（ジョゼ・ジラスとベンチーニョ〔サンチアゴの子供時代〕の会話）、五十四章（サンチアゴと『聖モニカの賛歌』の作者の会話）、九十三章（ベンチーニョと奴隷の会話）、百八章（サンチャとベンチーニョの会話）、百十章（ベンチーニョとカトウの会話）、百四十五章（サンチアゴとエゼキエルの会話）。椰子菓子売りの歌のエピソードが出てくるのは、十八章、六十章、百九章、百十四章の四カ所。
- 2 このことは Coutinho 2001, p. 608. でも指摘されている。
- 3 神谷二〇〇七、二六〇頁。また自伝的記憶について、佐藤は「人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体」（佐藤他二〇〇四）、「エピソード記憶よりも曖昧な概念で、過去の自己に関わる情報の記憶」（佐藤他二〇〇八）と定義し、森は「人生の過去に関する記憶のすべてを意味する言葉である」と述べている（森二〇一三）。
- 4 佐藤他二〇〇八、六三頁。

- 5 神谷二〇一〇、二頁。不随意記憶以外には、意志を働かせて過去を思い出す形態である随意記憶、過去を思い出しているという意識がないにもかかわらず、過去の経験によって現在の考え方に影響を与える「潜在記憶」があるという。
- 6 佐藤他二〇〇八、四二頁。
- 7 神谷二〇一〇、六頁。
- 8 Juracy Assmann Saraiva (Saraiva 1993, pp. 94-95) をはじめとして多くの研究者が指摘している。
- 9 佐藤他二〇〇四、十頁。
- 10 浜田二〇〇九、二〇一頁。
- 11 佐藤他二〇〇八。
- 12 サンチアゴが神学校に入ったのは、「ある午後」から数か月後とあるので(五十章)、一八五八年の五月前後だろうか。そして、神学校を中退したのは、十七歳のときの年末なので(九十七章)、一八五九年だということになる。
- 13 おそらくこれを最初に指摘したのはヘレン・コードウエルで、それがシルヴィア・サンチアゴによって引用され、その後は多くの研究者によっても指摘されることとなった。この二人は、全体の三分の二がカピトゥの幼少時代に充てられ、大人のカピトゥには三分の一しか紙面が割かれていないという捉え方をしている。
- 14 レミニセンス・バンプについては、ニース二〇一二には「おおむね十歳から三十歳くらいまでの間に経験した出来事が、それ以前やそれ以後の経験よりもたくさん思い出せる」、佐藤二〇〇八には「十歳〜三十歳の出来事の想起量が多いという現象」とある。
- 15 浜田二〇〇九、七四頁。
- 16 同書、一一九頁。
- 17 同書、一一八頁。
- 18 Machado de Assis 2008, p. 264.
- 19 Ibid., p. 266.
- 20 Ibid., p. 236.
- 21 Caldwell 1960, pp. 138-139.
- 22 Schwarz 2006, p. 29.
- 23 浜田二〇〇九、四五頁。
- 24 菊池二〇〇八、五四頁。
- 25 同書、九四頁。
- 26 同書、九六―九七頁。
- 27 同書、一〇一頁。
- 28 榎本二〇〇九、七〇頁。
- 29 菊池二〇〇八、九九頁。
- 30 Schwarz, p. 26. 以下、この段落の引用箇所解釈の多様性については、同書のこの部分を参照した。
- 31 菊池、二〇〇八、一〇三頁。
- 32 同書、五四頁。
- 33 佐藤他二〇〇八、六三頁。
- 34 同書、六五頁。
- 35 菊池二〇〇八、三一頁。
- 36 浜田二〇〇九、一八四頁。
- 37 同書、一八五頁。

## 参考文献



- CALDWELL, Helen. 1960. *The Brazilian Ohello of Machado de Assis: a Study of Dom Casimiro*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Coutinho, Afrânio / Souza, José Galante de 1990 *Enciclopedia Literatura Brasileira*. São Paulo: Global.
- Franchetti, Paulo 2008 "Fortuna crítica revisitada". In *Jornal da Unicamp*, 25 a 31 de agosto de 2008 - ANO XXII - No. 406. [http://www.unicamp.br/unicamp/unicamp\\_hoje/ju/agosto2008/ju406\\_pag04.php](http://www.unicamp.br/unicamp/unicamp_hoje/ju/agosto2008/ju406_pag04.php) 閲覧日：二〇一三年一月五日。
- Machado de Assis. 2008 *Obra completa em quatro volumes*. Vol. 1. Rio de Janeiro: Editora Nova Aguilar.
- SANTIAGO, Silvano 1978 "A retórica de verrossimilhança". In: -----, *Uma literatura nos trópicos*. São Paulo: Perspectiva.
- SARAIVA, Assmann 1993 *O Circuito das Memórias em Machado de Assis*. São Leopoldo, RS: Editora Unisinos.
- SCHWARZ, Roberto 2006 *Duas meninas*. 2a edição. São Paulo: Companhia das Letras.
- 榎本博明 二〇〇九『記憶はウソをつく』、祥伝社。
- 神谷俊次 二〇〇四「不随意記憶の感情一致想起効果に関する研究」、『アカデミア』人文・社会科学編第七九号、六五―八六頁、南山大学。 <http://www.hum.meijo-u.ac.jp/labs/hh002/paper/content/pdf/acad-hs79.pdf> アクセス：二〇一三年十一月五日。
- 神谷俊次 二〇一〇「想起契機からみた不随意記憶の機能に関する研究」、『アカデミア』自然科学・保健体育編第一五巻、一一―一六頁。 <http://www.hum.meijo-u.ac.jp/labs/hh002/paper/content/pdf/acad-ns15.pdf> アクセス：二〇一三年十一月五日。
- 神谷俊次 二〇〇七「不随意記憶の自己確認機能に関する研究」、『心理学研究』第七八巻第三号、二六〇―二六八頁。 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy/1926/78/3/78\\_3\\_260/pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy/1926/78/3/78_3_260/pdf) アクセス：二〇一三年十一月五日。
- 菊池聡 二〇〇八『自分だまし』の心理学』、祥伝社。
- ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング、池内紀訳 二〇〇八『ファウスト第一部』(第五刷)、集英社文庫ヘリテージシリーズ。
- 佐藤浩一他 二〇〇四「自伝的記憶研究の理論と方法」、日本認知科学会。 <http://www.jcss.gr.jp/technicalreport/TR51.pdf> アクセス：二〇一三年一月五日。
- 佐藤浩一／越智啓太／下島裕美編著『自伝的記憶の心理学』、北大路書房。
- スープレナント、A. M. / ニース、I. 今井久登訳『記憶の原理』、勁草書房。
- 武田千香 一九九六『ドン・カズムーロ』の両義性のトリック』、日本ポルトガルブラジル学会『Anais XIX』(一九九六年度)号、四五―五八頁。
- 武田千香 一九九八『オセロウ』から『ドン・カズムーロ』——主人公の「嫉妬」を中心に見たブラジル版オセロウの翻案——、神奈川大学『人文研究』第一三三号、七五―一〇三頁。
- 武田千香 二〇〇〇「マシャード・デ・アシスの〈語り〉についての一考察——『ドン・カズムーロ』を中心に」、國學院大學紀要第三八巻、六九―九四頁。
- 武田千香 二〇一〇『ドン・カズムッホ』と探偵小説』、『東京外国語大学論集』第八二号、二五一―二七七頁。
- 浜田寿美男 二〇〇九『私と他者の語りの世界：精神の生態学へ向けて』、ミネルヴァ書房。
- フォスター、ジョナサン・K、郭哲次訳『記憶』、星和書店。
- マシャード・ジ・アシス、武田千香訳 二〇一〇『ブラス・クーバスの死後の回想』(古典新訳シリーズ)、光文社。

森茂起 二〇一三 『自伝的記憶と心理療法』 (甲南大学人間科学研究所叢書 ..  
心の危機と臨床の知第一五巻)、平凡社。